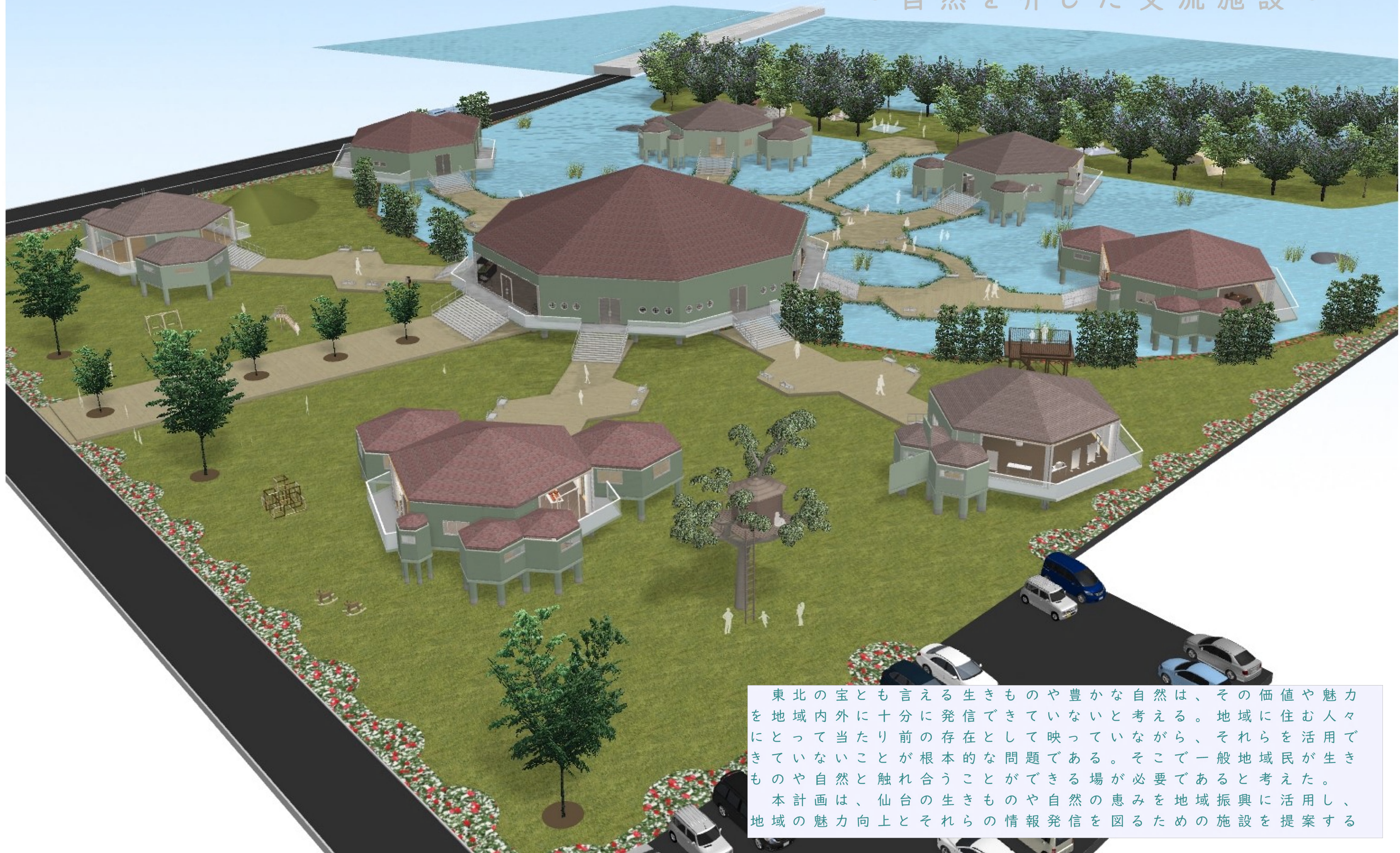


広瀬川リバーフロント活性化計画

～自然を介した交流施設～



東北の宝とも言える生きものや豊かな自然は、その価値や魅力を地域内外に十分に発信できていないと考える。地域に住む人々にとって当たり前の存在として映っていないながら、それらを活用できていないことが根本的な問題である。そこで一般地域民が生きものや自然と触れ合うことができる場が必要であると考えた。

本計画は、仙台の生きものや自然の恵みを地域振興に活用し、地域の魅力向上とそれらの情報発信を図るための施設を提案する

問題点

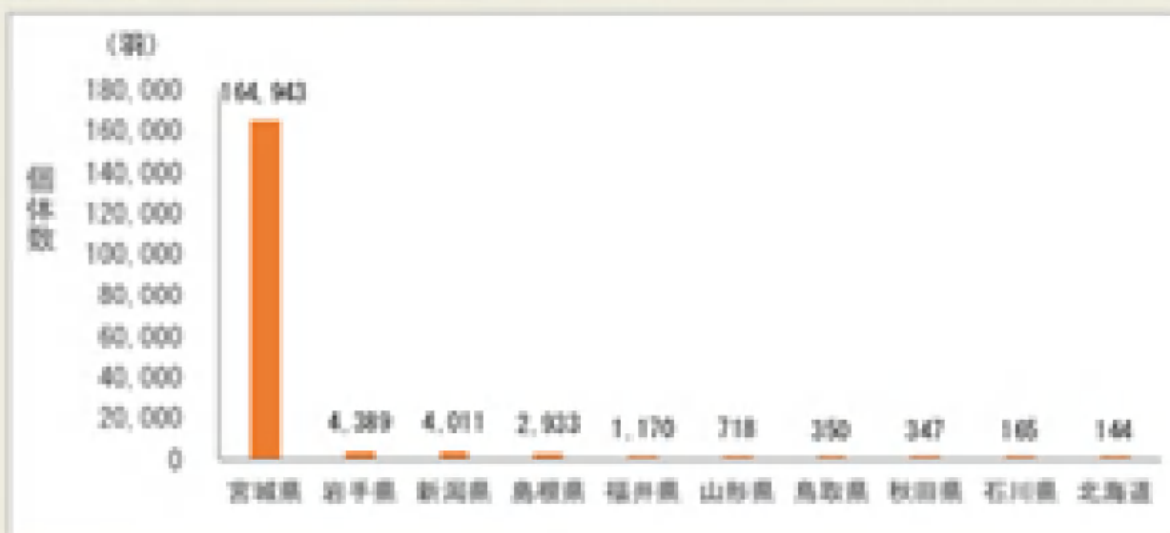
■ 東北生態系ネットワーク推進協議会によると東北の宝とも言える生きものや豊かな自然は、流域に住む人々には身近で当たり前の存在として映り、その価値や魅力を地域内外に十分に発信できていない面があるという。

■ 政令指定都市の中でも自然が多いとされる仙台市で、豊かな川として唯一流れている広瀬川では行われているイベントが灯籠流しや芋煮会などしかなく、一般市民が広瀬川を活用できていないことが分かる。また、広瀬川にいる生き物はアユ、オイカワ、サケ、ウグイ等が確認されており沢山の生き物が生息していることが分かる。

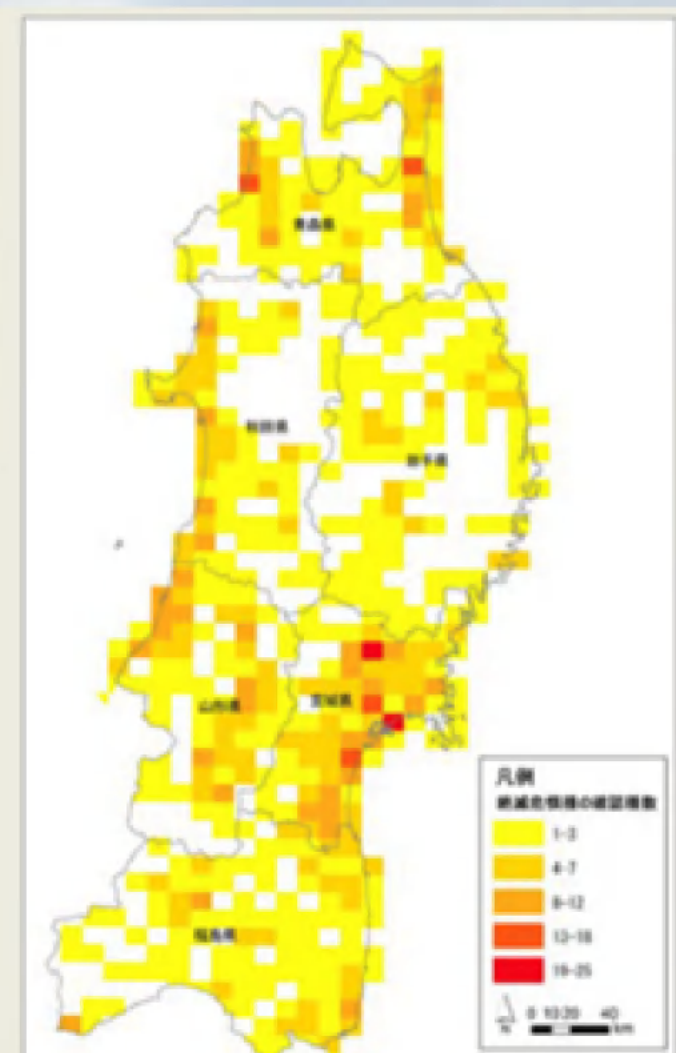
これらのことから

広瀬川を基軸とした豊かで健全な生態系による様々な自然の恵みや価値を観光資源等として地域振興に活用し、地域の魅力向上とそれらの情報発信を図るための施設を提案する。そして同時に広瀬川リバーフロントの活性化を狙う。

■ 左下のグラフは全国調査における都道府県別のマガンの確認個体数で、宮城県が圧倒的に1位であることが分かるが、右下の図の水辺の開発により減少したとされる絶滅危惧種の確認種数では、宮城県は特に多く、生き物や自然の価値や魅力を活かせていないことが分かる。



全国調査における都道府県別のマガンの確認個体数
出典：環境省 平成28年度ガンカモ類の生息調査（平成29年1月調査実施）



水辺の開発により減少したとされている絶滅危惧種の確認種数
出典：環境省 生物多様性評価地図をもとに作成

計画地

計画地は、宮城県仙台市青葉区青葉山にある広瀬川に隣接した土地である。敷地のすぐ隣にはバス停がある。また、地下鉄駅も近くにあり、アクセスのしやすさから、この敷地を選定した。

大橋とるーぷる仙台

大橋は、名取川水系の広瀬川にかかる橋である。橋から西に向かっては、正面に大手門閘槽を、その左に青葉山を見上げる。るーぷる仙台は、仙台市内の観光地を循環する路線バスである。仙台駅を起点に仙台市都心部と青葉山地区の観光地を繋ぎ、約70分かけて時計回りに回っている。

大橋から見た広瀬川

広瀬川は仙台市のシンボルとして親しまれている川である。宮城県仙台市を流れる名取川水系名取川支流の一般河川であり、両岸には自然が多く残されている。

計画地付近から見た広瀬川

現在の計画地

現在、計画敷地では仙台の歴史・文化を発信する場として「公園センター」の計画・整備が進められている。都市緑化フェアと同時にオープニング予定である。

示されている基本コンセプトは、「ビクターセンターとしての機能をベースとしつつ、青葉山公園の玄関口という立地特性や藩政時代からの歴史性を踏まえた仙台の歴史・文化を発信する場、そしてより健康に、何度でも訪れたくなる場所」として位置づけられている。仙台の伝え方を創造し、仙台藩のときの記憶を思い起こさせるような施設が目指されている。具体的には、片倉屋敷（桃山建築）の造りを受け継ぎ、軸線を揃えた配置が計画されている。そうすることで当時のスケール感を体験できるようになるそうだ。

他には、仙台国際センター前の交差点から人と風の流れができるような設計にすることで、内と外を繋ぎ公園活動の拠点となるように造られる予定である。また、配置予定のライブラリーのカウンターは「広瀬川カウンター」と名付け、広瀬川の形が表現されたデザインにする等の工夫がされている。

しかし広瀬川が隣接した土地という立地特性が施設機能に活かされていない様に思う。広瀬川の生きものや豊かな自然の価値や魅力を地域内外に発信しつつ、地域に住む人々が広瀬川を活用できる施設が必要であると考えた。そこで広瀬川の魅力を取り込み、自然と触れ合うことができる様な施設を計画する。

コンセプト

「蓮の花」をイメージしたファサードに
「蓮の花」をイメージしたファサードに

広瀬川と繋がる支流をつくり、ビオトープとして機能させる。川に隣接した土地であることから建物は地盤のことを考え、1階はピロティにし、機能する室は2階に入れる。また、機能によって分かれた分散型にし、デッキで繋げる。イメージは蓮の花である。水面に広がる蓮の花のように、真ん中の建物から広がる形で様々な大きさの建物を配置する。ビオトープの上にもいくつか建物を配置して水の上に浮かぶ蓮の花を表現する。

2021年12月現在の国際センターの様子

機能構成は飲食・休憩を行う「憩う空間、情報発信を行う「楽しむ」空間、体験・交流を行う「集う」空間、利用サービス・管理を行う「共用」空間からなっている。



外部空間は機動力のある芝生が敷かれる予定である。庭園を2つ配置して建物を貫通するように杜をつくることで杜の都が表現されている。

川の近くはシティビューが望めるように広がりを持たせて計画されている。広瀬川と共にある仙台を感じられるように、広瀬川の川沿いは1km歩けるようになっている。

国際センター駅

仙台市地下鉄東西線の駅。1階コンコースにはインフォメーションコーナーが併設される。2階部分は多目的スペースとされイベント等に利用可能なほか、カフェが営業している。

仙台国際センター

センターは6カ国語同時通訳設備を持つ国際会議場を備えたコンベンションセンター、および、一般市民向けの国際交流施設の2つの機能を持つ複合施設である。「会議棟」と「展示棟」構成される。

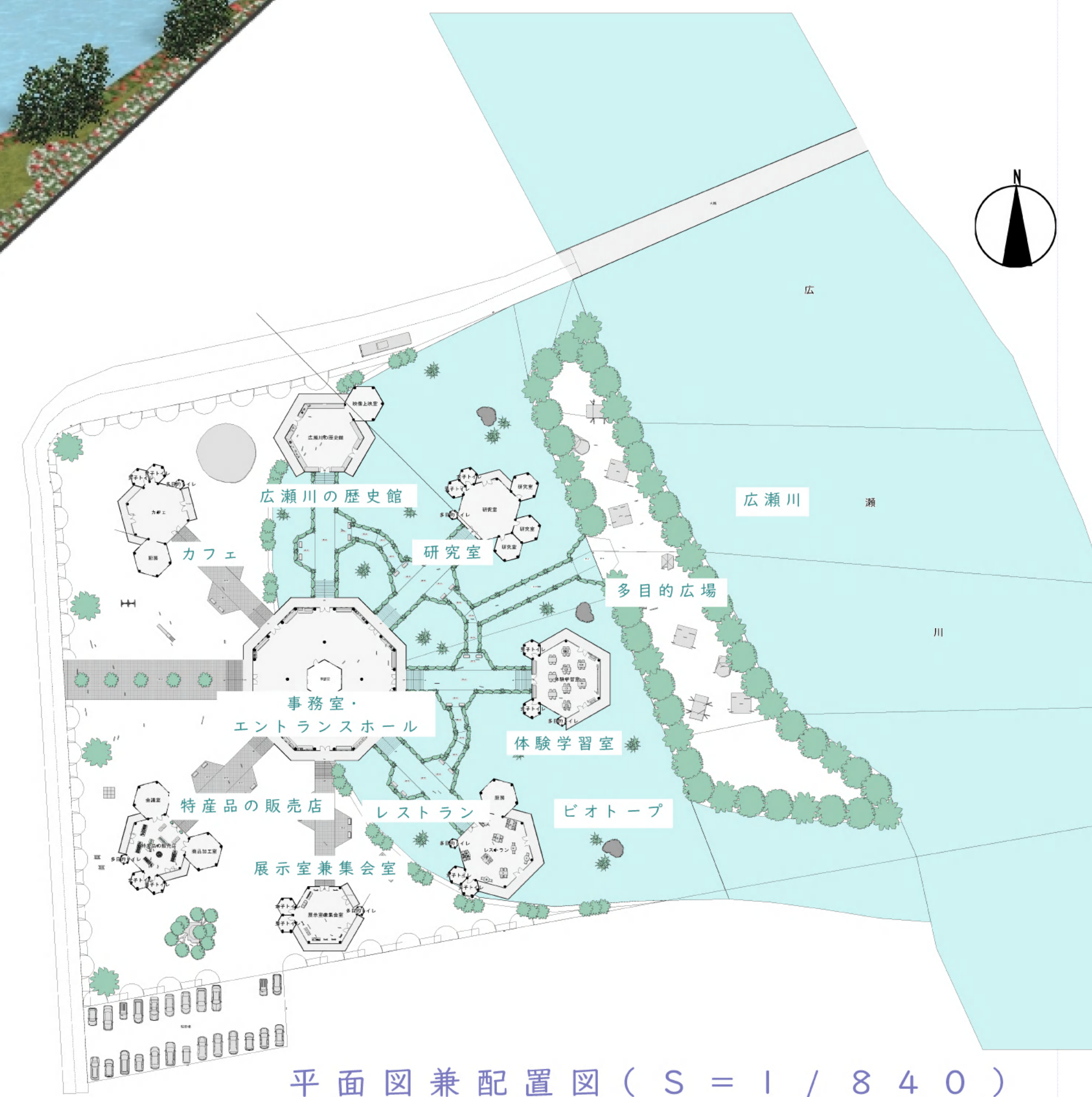
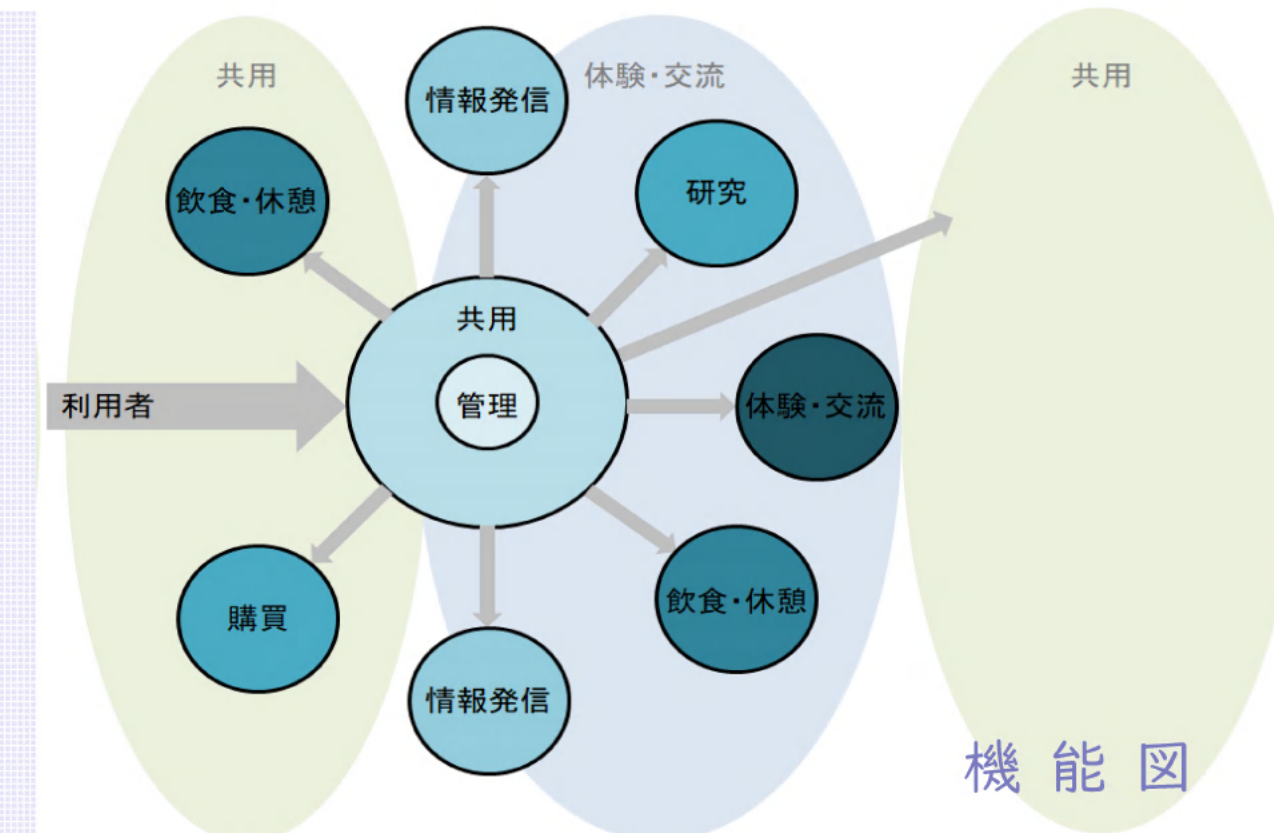
仙台市博物館

仙台市博物館には江戸時代の仙台藩に関連する歴史資料、文化資料、美術工芸品約9万7000点が収蔵され、そのうち約1000点が展示されている。伊達氏や慶長遣欧使節に関連するものが充実し、その中でも『奥州仙台領絵図』は、幅8メートルもある巨大な絵図であり、人気の展示となっている。2021年10月1日～2024年3月31日まで超寿命化等改修工事に伴い休館予定である。

アクソメ図・平面図

■ 施設機能 ■

- (1) 子ども達が学べる場として、流域の生き物調査・水槽で生き物観察・広瀬川の水質調査を行う体験学習室
- (2) 若者から高齢者を含めた大人も学習できる様に常設展の他に映像上映を行う広瀬川の歴史展示室
- (3) 担い手の育成を目的として、流域に関する情報の収集・発信と地域復興の取り組みを発信する講演会を行う為の研究室
- (4) 地域資源を活用した体験型の観光プログラムとして、野生生物との接し方を学ぶセミナーとマガンの飛び立ちをテーマにしたエコツアーを行う為の集会室兼展示室
- (5) 水辺を活かした農法の開発と生産された農作物のブランド化を目的とした特産品の販売店
- (6) 地域の特産品を主に使用することで、食育を通じて自然との共生を学ぶことが出来るレストラン・カフェ



アクソメ図

内観プラン

- ・ 体験学習室
- ・ レストラン
- ・ 展示室兼集会室

体験学習室



広瀬川流域で生息している魚や虫などの生き物を実際に水槽で観察して学ぶ。また、リトマス紙等の実験器具を使用したり、生息している生き物から考察して広瀬川の水質調査を行う。ビオトープに行って自然と触れ合いながら学ぶプログラムがあり、アクティブな体験をすることで子供たちが学習に取り組みやすくなり、より楽しく主体的に広瀬川について学ぶことができる。

また、普段学校で接している友達とは違うひとと交流しながら勉強することで会話力やコミュニケーション能力を高め成長する場としても機能させる。

- ・ エントランスホール
- ・ 広瀬川の歴史館
- ・ 特産品の販売店

エントランスホール



敷地中央に配置するエントランスホールは正面の壁とビオトープに接する壁がガラス張りになっている。そうすることで室内に居ながらも外のビオトープや広瀬川を望むことができる。また、室の壁際には水槽を設置して東北に生息している魚等の生き物が観察できる小さな水族館として機能させる。東北の生き物について知ることができ、また施設に訪れたひとを癒す空間となる。



レストラン

出す料理は宮城の特産品を主に使用している。メニューには食材の情報が書いてあり、選びながら宮城の特産品についての知ることが出来る。野菜や魚等の生き物について考えながら、食育を通じて自然との共生を学ぶことが出来るレストランとして機能させる。



広瀬川の歴史館

幅広い世代に施設を利用してもらうため、若者から高齢者を含めた大人も学習できる様な落ち着いた雰囲気的空間である。この室は広瀬川の歴史について学ぶ場として機能させる。どのような生き物が生息していたのか、広瀬川流域の土地がどのように変化してきたかを展示する。常設展の他に映像上映を行うことで優雅な時間として過ごすことができる。

展示室兼集会室

体験型の観光プログラムとして、野生生物との接し方を学ぶセミナーを行った。宮城県に飛来するマガンの飛び立ちをテーマにしたエコツアーを行う。集会所として機能させる。普段は過去の活動や実績を一般公開した展示室として機能する。



特産品の販売店

宮城の特産品を取り扱った販売店。消費者と生産者を結びつける地元消費地産物販売組合、果物や伝統工芸品等を販売している。広瀬川流域という水辺を活かした農法の開発や生産された農作物のブランド化を行うための会議室や商品加工室が設置してある。



外観プラン

水連をイメージしたため、外観になっているため、建物の色は葉っぱをイメージしたグリーン系の色を配し、屋根は花をイメージして二つの同系色のレンガを使っている。

建物の形が六角形であるのは、水面に広がる睡蓮を表現するため、各方面に繋がりやすい形であり、一つの建物から広がっていく形状に配置することが出来るためである。

デッキにより、各建物へのひとの動きの流れをつくった。それに対し、芝生部分は動きの自由度を高くすることで全体のバランスが良くなるように計画した。

真俯瞰図
(S = 1 / 550)



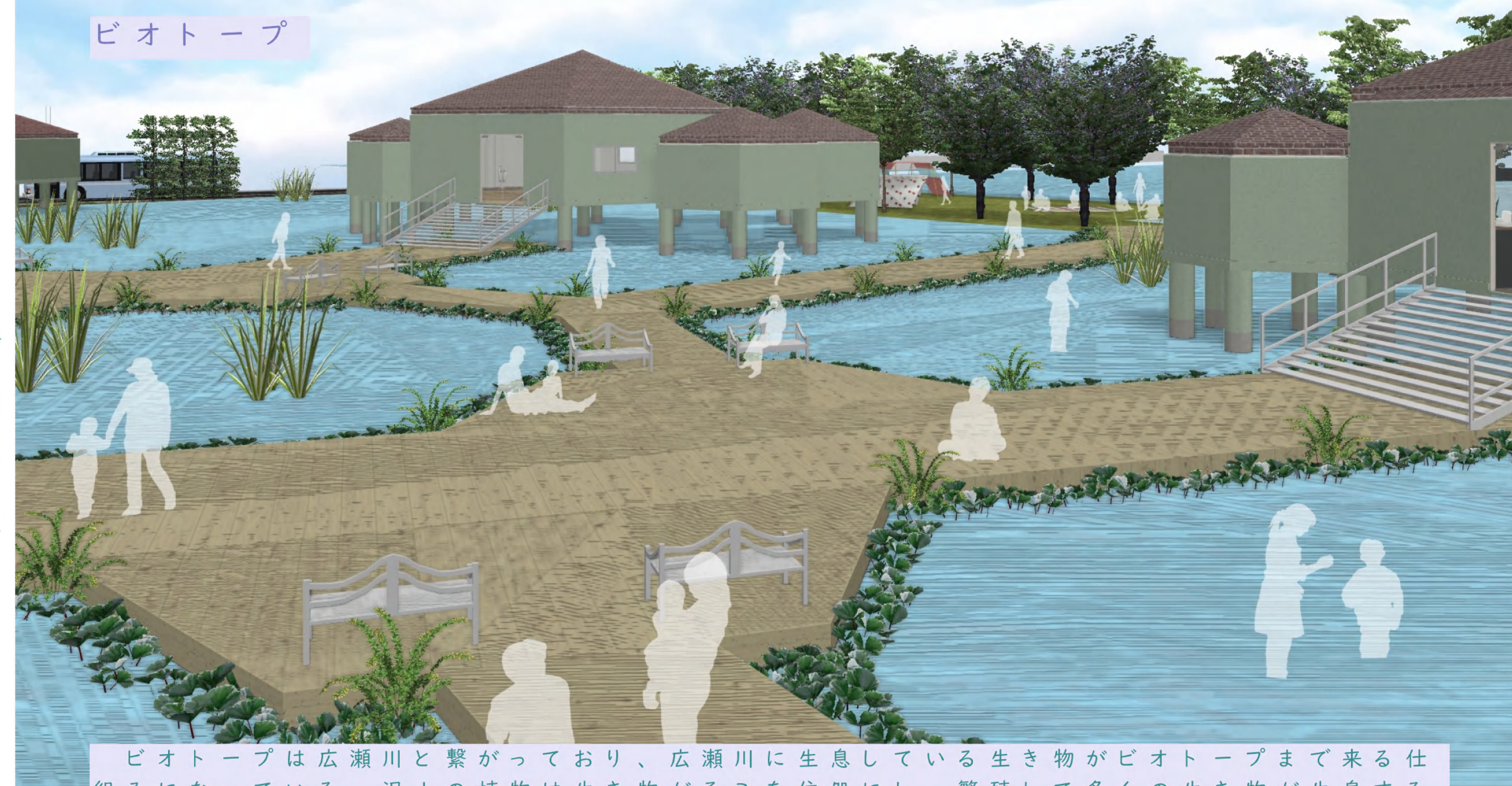
西側立面図 (S = 1 / 570)



北側立面図 (S = 1 / 570)

- ・ ビオトープ
- ・ 多目的広場
- ・ 施設正面

ビオトープ



ビオトープは広瀬川と繋がっており、広瀬川に生息している生き物がビオトープまで来る仕組みになっている。沢山の植物は生き物がそこを住処にし、繁殖して多くの生き物が生息することが目的である。学習する場としても機能しながら、子供連れの家族にとっては自然と触れ合うことのできる遊びの場としても機能する。水深は浅く、ビオトープに入って生き物観察が行える。

多目的広場

離島のようにになっている多目的広場は、デッキで繋ぎ、そこを渡って利用することができる。広瀬川に直接接している敷地全体の中で最も近くで広瀬川を感じられるようになっている。広場はテントを立たせることが出来るのでゆっくりと広瀬川の景色を楽しむことが出来る。



施設正面

杜の都といわれる仙台のシンボルである定禅寺通りをイメージしてエントランスホールへと向かうデッキに並木を配置した。この道が施設の顔となり、訪れたひと達を最初に迎える。緑を感じながら施設へ足を運ぶことが出来る。

